

27 日本プロテスタント・ミッシヨン

医療伝道の方針転換についての一考察

高 安 伸 子

演者は第九五回日本医史学会総会において幕末から明治中期（一八五九—一八八九）までに、各プロテスタント・ミッシヨンが日本において行った医療伝道について報告した。その際の報告は主資料として明治学院大学図書館に所蔵されている全国宣教師会議議事録『PROCEEDINGS OF THE GENERAL CONFERENCE OF THE PROTESTANT MISSIONARIES OF JAPAN, HELD AT OSAKA, JAPAN, APRIL, 1883.』を使用し、一八八三年四月二〇日に行われたメデイカルミッシヨンに関する会議で医師としての立場から発表したパーム（T.A. Palm）‘ベリー（J.C. Berry）’、テイラー（W. Taylor）三人の宣教医の論文から日本におけるプロテスタント・ミッシヨンの医療伝道についての考察を行った。

この報告で一八八三年の全国宣教師会議においては「General subject of the day: — MEDICAL MISSIONS.」とされているのに対して、一九〇〇年の全国宣教師会議では「Subject—Social Movements.」という項目の中で「Medical Work.」として、医療活動が取り上げられていたことに触れた。今回の報告では、主資料として同じく明治学院大学図書館所蔵の全国宣教師会議議事録『PROCEEDINGS OF THE GENERAL CONFERENCE OF PROTESTANT MISSIONARIES IN JAPAN HELD in Tokyo October 24-31, 1900.』を使用し、日本において医療伝道が一八八三年以降どのように推移したのかについて考察を進めた。一八八三年の全国宣教師会議で医師の立場からの報告者は、前述のとおり三名であった。しかし、この一九〇〇年の全国宣教師会議での報告者はアメリカン・ボード所属のテイラー（Wallace Taylor）のみで、題名は『Medical Work: its Results and Prospects.』である。このテイラーの論文の存在については、すでに長門谷洋治が『日本医史学雑誌』第一六巻第一号掲載の「近代日本における外人宣教医の

研究」で明らかにしている。長門谷の論文は内容について触れていないので、概要を紹介しておきたい。

テイラーが全国宣教師会議で発表した論文、『Medical Work: its Results and Prospects.』は SOCIAL MOVEMENTS, FIRST PAPER として出されており、その討論ではホイットニーが意見を述べている。テイラーは日本における医療伝道の歴史と、現在（一九〇〇年）その医療伝道が本来の働きを失いつつあることを述べたあとに、現在のような状況を招いた理由として次のように分析している。「日本人のよりよく訓練を受けたすぐれた医師が増加し、明治初期のようにわれわれの手助けを受けなくとも病人の治療を行うことができるようになってきた。そうなると、日本人の患者たちは外国人の医師のところより日本人の医師のところへ治療を受けにくくなるようになり、われわれの働きは徐々に衰え、医療伝道というものが短縮される要因となった。」

テイラーは医療伝道 (MEDICAL MISSIONS) の将来性として次のような方針へ転換すべきであると述べている。それは社会（慈善）事業への転換である。かれは日本

と英国、米国における慈善活動状況の比較をおこない、日本での社会事業の遅れを指摘している。そして貧困家庭を援助することや、精神異常者、眼の不自由なもの、聾啞者、そしてライ病患者のための施設の拡充が必要であり、チャリティーこそが、今後の医療活動の中心となるべきものであるとの考えを発表している。

全国宣教師会議でテイラーが示した、医療活動上の方針転換の意図を考えてみたい。日本でのキリスト教伝道事業において、かれら来日宣教医の医療技術（施療所病院等での診療）を用いた伝道方法に頼る必要性がなくなつたために生じたものであるのか、あるいは明治中期から変貌していく明治政府の政策に各ミッションの伝道方針を変えて対応するための手段であつたのであろうか。また、その方向が変化したことによつて日本での社会事業がどのように発展し、現代の日本に受け継がれているのであろうか。

報告では、この点について医史学とキリスト教伝道史などの面から、さらに考察をくわえていくつもりである。

（順天堂大学医学部医史学研究室）